

2023年度（第5回）口語詩句賞の授賞

公益財団法人佐々木泰樹育英会（2016年設立、理事長＝佐々木泰樹）は、2023年12月6日に2023年度口語詩句賞授賞式を開催し、各賞を下記の8名に授賞しました。

授賞対象

新人賞（賞金 100万円）	吉沢美香
優秀賞（賞金 50万円）	江藤裕子（筆名 奎 ^{もく} いう子）
奨励賞（賞金 各10万円）	奥村俊哉（筆名 長谷川 ^{しゅう} 柊 ^か 香）
	白野実悠（筆名 白野 ^{み ゆ} ）
	中矢 ^{のどか} 温
	橋田純寧（筆名 こはくいろ）
	松浦桜香（筆名 桜 ^{さくらもち} 望子 ^こ ）
	松下誠一

選考委員

木下龍也（歌人）、小島なお（歌人）、杉本真維子（詩人）、高橋修宏（俳人・詩人）、立花 開（歌人）、西舩かずよし（俳人）、林 桂（俳人）、龍 秀美（詩人）

リンク

2023年度口語詩句賞（総合）	https://sasakitaijuikueikai.or.jp/news/2824/
同 受賞作品	https://www.kougoshiku-toukou.com/result/competition/38949/38950/
同 選考委員総評	https://www.kougoshiku-toukou.com/assessment/
財団概要『公益財団法人佐々木泰樹育英会2023』	https://sasakitaijuikueikai.or.jp/news/2582/

口語詩句賞は2019年度設立の公募の文学賞です。通例、短歌や俳句、川柳、現代詩など、ジャンルごとに評価される日本語の短詩領域において、「口語」であることを軸とし、様々なジャンルの作品を包含する点を大きな特徴としています。

佐々木泰樹育英会は「口語詩句投稿サイト72h」（<https://www.kougoshiku-toukou.com/>）を創作・発表のプラットフォームとして、「口語詩句賞」および「口語詩句奨学金」（中学生・高校生・大学生）の事業を展開し、口語による短詩の創作活動普及を推進しています。

後援＝現代俳句協会、思潮社 現代詩手帖編集部

本件に関するお問合せ先

公益財団法人佐々木泰樹育英会事務局 jimukyoku@sasakitaijuikueikai.or.jp

二〇二三年度（第五回）口語詩句賞
受賞作品

新人賞

吉沢美香

よしざわみか。本名同じ。一九九九年生まれ、宮城県在住、東北大学大学院工学研究科在学。創作歴七年五ヶ月。二〇二二年度口語詩句賞学生、二〇二二年度口語詩句賞奨励賞。

朧夜の黒子が動き出しそうに

春眠の氷砂糖の芯濁る

水筒の水鳴る坂若葉風

蛇口には星の通った跡紫陽花

紫陽花と名付けるために犬を飼う

夕立を見る心臓のやわらかさ

虹消えて眼の中にある水分

雨漏りの溜まる花瓶

神の旅

クレンジングバーム

ひんやり虫の闇

今朝の冬半透明の黄の付箋

優秀賞

本いう子

もくいうこ。本名〓江藤裕子。一九八四年生まれ、佐賀県在住、自営業。創作歴十一年十ヶ月。二〇二二年度口語詩句賞奨励賞。

春の海一人のための降車ボタン

丁寧な軍手を干して海女の午後

蚕ふしふしふしと不死嚙み砕く

「人類の敵」に人名麦の秋

梅雨入りを逃げて琥珀の中にいる

半夏生まばたきだって水の音

コスモスをくすぐりながら下校班

たくさんさんのミッフィーの口十二月

嫁入りは鯨に吞まれゆくように

晩冬の螺旋ばかりの試し書き

奨励賞

長谷川柊香

はせがわしゅうか。本名〓奥村俊哉。一九九九年生まれ、宮城県在住、東北大学理学部在学。創作歴四年六ヶ月。二〇二〇年度～二〇二三年度口語詩句賞学生、二〇一九年度口語詩句賞奨励賞・二〇二〇年度同奨励賞・二〇二二年度同優秀賞。

精神科のしろばらすこしきいろ

寒晴の少女コントラバス背負う

雪のこえ開いたままの解剖図

コンビニは常に明るい敗戦日

アイライン長し白鳥眠るに似て

踊り場で息継ぎをする

遠くに夏の海

月光にピアノの蓋を閉じ卒業

羊羹が肉片めいて漱石忌

骨肉を運ぶ終戦日の地下鉄

巻貝に聴く

未生の

吾子の

こえ

奨励賞

白野

しろの。本名〓白野実悠。二〇〇一年生まれ、新潟県在住、新潟大学人文学部在学。創作歴三年三ヶ月。二〇二一年度～二〇二三年度口語詩句賞学生。

カントリーマアムのない味を

言い合って言い尽くしてから

渚になった

ベランダのない部屋 あなたは
全てより一つがよくて両手で拭う

約束をしない小指で叩かれる

Back space キー

離島めいて

薄荷飴みたいな俯瞰を置いていく

たとえば運動会の砂場に

しあわせとしあわせそうな顔が

ずっと離ればなれで米だけ残す

リセッシュの消費量と同じくらい

の言葉をずっと飲み込んで立つ

あたらしい靴下を嗅ぐと

あたらしい匂い 春は鈍行で来る

ライターが映し出すわずかな海に

進路希望の用紙を放った

生きたくて生きているみたいな顔

でオレンジジュース渡してくれる

福耳、と君に言われてその日から
国語の成績が下がりはじめた

奨励賞

中矢温

なかやのどか。本名同じ。一九九九年生まれ、愛媛県在住、東京大学大学院総合文化研究科在学。創作歴九年二ヶ月。二〇二二年～二〇二三年度口語詩句賞学生、二〇二二年度口語詩句

賞奨励賞。

漱ぐ 言葉貧しくして光れ

真昼間の柱時計を巻く仕事

貸ボートみな八月の湖のうえ

来世あるはず心に象を住まわせて

セプテンバー瞳のなかで混ぜる白

天文学は天の文学水絞る

空に鳶鉄条網に毛布干す

帯電の身体で泳ぐあおみどり

白浪の晴れてことばの日本海

一日を船はあおぞら梳る

奨励賞

こはくいろ

本名〓橋田純寧。二〇〇四年生まれ、大阪府在住、カフェ店員。創作歴五年三ヶ月。二〇二二年度口語詩句賞優秀賞。

そうじゃない、ほうの

世界に行きたくて

小さなかかとを放りだす夜

まだたましいに

ならないところがかゆい

万華鏡よりは顕微鏡だったかな
はみ出すくらいに君だったんだ

せんせい、かぎかつこ

閉じたくないです

あとから痛むの知ってるんでしょ

ランダムに光るかなしみ

営みを、葬るなかれ

葬るなかれ。

わたしはわたしを遠ざけて

生きながらえた、鈴の音がする。

そらを担えよ。

身体なんて、

日常の輪郭。

君のまなざしにふれて

ブランコをする私の身体は

きちんと私を訪ねてくれる

羽化、

ひらがなのように

ほどけた

ひかりと生きて

夕立を私のなかに隠しもつ

いつか名を呼ぶ我が子のために

奨励賞

桜望子

さくらもちこ。本名〓松浦桜香。一九九四年生まれ、山形県在住、学芸員。創作歴七年十一ヶ月。

月。二〇一九年度口語詩句賞奨励賞。

さよならは春の領域

遠のいていく

drippingで彩られた町

自己陶醉するメタファーに

食べさせてやる天牛

透明な

瓶に砂糖を入れ替える

身体表現は得意ではない

風鈴の内臓部分に満ちる闇

舌触りの良い言葉を並べれば

壊しても良い楽器

カサブランカまだ題名のない無題

人間は一番手軽な管楽器

鼻歌を聞きながら眠って

来るかもわからない

人を待っている

自らの蜜で開かない

芍薬をぬるま湯で拭く

私性の不在に打つ四拍子

人をまだ

諦めないでいる

油彩絵の具で汚す服

奨励賞

松下誠一

まつしたせいいち。本名同じ。二〇〇二年生まれ、東京都在住、東京電機大学工学部在学。創作歴二年十一ヶ月。二〇二二年度・二〇二三年度口語詩句奨励学生。

茄子を煮る夜になっても構わない

こっちこそ蛸を仲間にしてごめん

豚ばらにしろごまをふる以前以後

ここは森オートロックのはやい森

草原の独りをなぜ造ろうとする

きのうまで稲妻だったキリンたち

こいびとの胃に数百のしらすの目

愛されているのに翼が生えている

さん付けに戻してそそぐ烏龍茶

腕相撲にしては焦げ臭くないか

新人賞

吉沢美香

青森県の黒石に生まれ、弘前の小さな林檎園を営む家で育ち、自然に囲まれて過ごしてきました。高校二年生の時に友達に誘われ俳句甲子園に参加し、そこで俳句の楽しさに気付きました。大好きな自然を詠めること、うまく出せない自分の気持ちも表現できること、俳句を作る中で日常の中に新たな発見を得られること、俳句の様々な面に惹かれ、また、助けられてきました。大学に入学してからは、土木について勉強しながら、より良い句を目指し、俳句に打ち込んできました。今回このような賞をいただくことができ、とても感激しております。これも、選考委員の先生方や、ことばの力詩集をはじめ、いつも様々な形で導き、支えてくださっている多くの方々のおかげです。深く感謝しております。

今は二十代で句集を出すことを目標に俳句を作り続けています。今回の受賞を励みにしながら、一句一句良い句を目指し、これまで以上に俳句を楽しんでいきます。

優秀賞

杏いう子

この度は、口語詩句賞優秀賞をいただき、ありがとうございます。

五七五の詩形は、SNS上で好きに呟き始めて、今に至っています。後に俳句には「師系」があると聞いたせいか、我流で始めた私は、いつもなかなか宙ぶらりん。田舎暮らしで出不精な性格もあり、同好の士と出会ったり、同世代と交流する機会もそうありません。

でも今は良い時代で、インターネット上に多くの知見があり、不特定多数に開かれた文芸空間も存在します。その中でも口語詩句投稿サイト72hは、さまざまな背景やルーツを持つ選者の目に触れ、評をいただける環境とその多様性が魅力です。日々投稿される多くの才能の煌めきに、時に目を見開かされる思いもします。他者から刺激を受けて自らを振り返る、貴重な体験ができています。

そんな空間で、俳句形式で綴る私の呟きが口語詩句として、詩を愛する人々に「届いた」。その事実が何より嬉しいです。これからも自分らしく、詩作と向き合っていきます。



授賞式写真 二〇二三年十二月六日